

回復期リハビリテーション病棟における入院時の BMI、栄養状態、骨格筋量の推移

沢田浩一 間下哲也 山本直子 川崎亮平 松本公博 松浦未央 山中学 須崎真

目的

栄養状態とリハビリの関係において、回復期リハビリ病棟協会栄養委員会の調査では、回復期リハ病棟に入院する患者の 43.5% に低栄養を認め、ADL が向上しにくいことが報告されている。今回、回復期リハ病棟入院患者について BMI、CONUT 法による栄養評価、骨格筋量に焦点をあて、調査を行った。

方法

平成 27 年 4 月 1 日から同 29 年 3 月 31 日に回復期リハ病棟に入院した患者 305 人（男性 80 名、女性 225 名）、平均年齢は 77.85 歳±11.15 歳（男性 70.7 歳±14.17 歳、女性 80.4 歳±8.51 歳）。入院時の血液検査結果と体成分分析装置 In Body S10 の測定結果を分析した。調査内容は、①BMI②CONUT 法による栄養評価③骨格筋量とした。統計は T 検定を用い $P<0.05$ を有意差ありとした。

結果

入院時、BMI18.5 未満では有意に体重が増加し、BMI25 以上では有意に体重が減少した。疾患で見ると整形疾患では体重に変化はなかったが、脳血管疾患では有意に体重が減少していた。CONUT 法による栄養評価、骨格筋量においては有意に改善が見られた。

考察及び結論

手術による栄養低下や安静による筋肉量の減少、脳血管疾患による消耗など様々な要因により、回復期リハ病棟入院時には低栄養患者が多く見られた。リハビリ効果を最大限に発揮するためにも、適切な栄養投与が大切であると考えた。